

さざなみ

# 国語教室

さざなみ国語教室  
 第477号 2021年12月25日  
 発行者代表 吉永幸司  
 連絡先 大津市柳川2-11-5  
 TEL 077-522-1008  
 発行所 滋賀児童文化協会  
 NPO 現代の教育問題研究所

## 夏の日

### 青木 千波

プールサイドまで届く水しぶき、入道雲が躍る七月。昨年コロナ禍で開催できなかった水泳学習を行った。特別支援教育に携わって五年、毎日子どもたちの素直な心に驚かされる。

今年、特別支援学級五組には、一年生が入学し、四月久しぶりに「はなのみち」の授業を行った。改めて挿絵の素晴らしさに気づかされる。春の池には、冬の挿絵に登場しないおたまじゃくしや蛙が描かれ、ちょうど飛び交って春を演出している。しかし、「おたまじゃくしだね。」と語りかけてもぴんとこない様子。見たことがないのである。

そこで私は、家の近くの用水路から生き物を捕まえて見せてあげることにした。ざりがにやおたまじゃくし、どじょうなど春や夏の生き物が勢ぞろいした。

「おたまじゃくしの色がちがう。」  
 「一本しかはさみがないざりがにがいる。」

など、毎日、発見の連続だ。図鑑を読み聞かせて気づいたのだが、ざりがにが片手なのは、『自切』という行為であった。

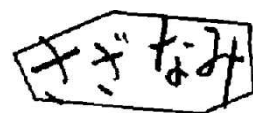
子どもたちは、気づいた疑問を解決できたとき、次の知的好奇心を高める。三年生の男子は、家から生活科の教科書を持ってきて

ざりがにの飼育を始めた。六年生の女子は、以前読んであげた「ざりがにのおうさままっかちゃん」のお話を思い出して、本棚から取ってきて、もう一度読んでいた。集団での学びは、常に連鎖し、広がっていく。

ある日、一年生の男の子がシャキン、シャキンと言いなながら水槽をのぞきこんでいた。しばらく黙って様子を見てみると、どうやらざりがにが、水面からはさみを出して威嚇しているシーンに出くわしたのだ。そして、はさみを動かす様子を言葉で表現していた。直接目に触れたものが子どもたちの心を動かし、新しい表現が生まれた。後日、男の子は、「ざりがにのたかいかい」と題して短い詩を書いた。

雨上がりの休日、田んぼの用水路から抜け出したのだろう。一本の手を振りかざしたざりがにを見つけた。ざりがにには、片手を振り上げ、どんなことにも立ち向かって挑戦する勇者の風格だ。未来に向かって今を力強く生きる子どもたちの姿と重なる。傍らには、そびえ立つ一輪の向日葵。その子どもたちに、負けてはいられない。あの向日葵のように、子どもたちに寄り添い、挑戦を続け、共に生きていこう。

(埼玉県春日部市立  
武里西小学校)



▼コミュニケーション能力とは、「他の人と意思疎通を上手に図る能力のこと」である。つまり、会話をすることだけでなく、お互いの感情を理解し合い、意味を共有する能力と

するならば、学校では、いつ、どこで指導するのかということについて考えてみた▼教室にはいろいろな子がいる。その中でもコミュニケーション能力が高いと思われる子について、家庭で心がけていることとして、次のことが挙げられている。①家族でたくさん会話を②親子の会話を丁寧にする③今日あった出来事を丁寧に聞いてあげる④具体的な会話やコミュニケーションの方法を教える。例えば、「こういう風に言ったら人はこう感じるよと伝える」というように。これらに共通していることは、子どもの話をしっかりと受け入れ、正しく導き会話の大切さを教えていることである▼国語科の授業はコミュニケーション能力を育成する大事な場である。「どんなことに心がけていますか」と問われたとき、日々の授業や生活の場面をもちに具体的に指導内容や方法、そして、成果や課題について語れるかということであろう。「最後まで聞いた上で、分かりづらい言い方は表現し直すことにしています」と、語っておられたお母さんの言葉が印象に残っている。(吉永幸司)

字形を意識して書く(書写)
海東 貴利

二年生書写。文字の外形を理解し、正しく整えて書くことを目標に、漢字の形を確かめて書く学習の時間。文字の大体の形(外形)を覚えて書くこと、整った文字になることに気づかせるため、文字のまわりを線で囲む学習を行った。この時間は、各自のタブレット端末に教材を送り、画面に映る漢字の外形に線を描くことができるソフトを使い文字の形を考えさせることにした。

①外形を考えて書くことと整った字になることを理解する。

まず、前面のモニターに様々な形で書いた漢字の「目」を表示した。表示した漢字の形は縦長のほか、横長、縦と横が同じくらいの形、上の方が広い形、下の方が広い形、中が広い形など全部で六種類。「整っている漢字はどれでしょう」と児童に問うと、一斉に縦長がよいと答えが返ってきた。「真四角は格好悪い」「ほかの漢字は目に見えない」など、他とどこが違うのか考えてつぶやく児童もいた。続けて、漢字の「四」を同じように様々な形で書いて見せた。「これは横長がいい」「いつも真四角にして書いていた」と予想した通りの反応。

ここで、「文字の周りを囲むと、その字の大体の形が分かります。」と説明し、文字の形を考えながら書くことにした。マスの中に破線で大体の外形が書かれている漢字

書き取りのシートを使って、六種類の外形を、文字を書いて確認した。

②字の周りを線で囲んで外形を確かめてから書く。

つぎに、各児童の端末へ漢字のシートを送り、タブレット内にあるソフトを使用して文字を囲む線を描かせ外形を確かめることにした。提示した漢字は各種の外形で書ける「月、太、半、図、心、書」である。はじめは、タブレットを活用すること自体に興味があるようだったが、線を描き始めると六種類の外形のどれにあてはまるのかじっくり考えようとする児童の様子が見られた。この学習活動においては、タブレットにある機能の活用が効果を発揮した。書いた線をすぐに消したり書き直したりでき、鉛筆で描くよりも躊躇なく行え、集中力の持続にもつながったようだ。また、各児童のシートを学級の全員に共有配信することですぐに自分の解答と比較することもできた。学級全員のシートをマルチに表示した画面をペアで見ながら外形を確かめさせた。「書」の外形は上が広いのがよいな「上」が広い外形にするためには、この画は一番長く書いた方が良かったんだ」と線で囲む中で、外形と画の長さの関係性が重要であることに気づくことができた。

そして、外形を確かめてから、六つの漢字をていねいにノートに書き、文字の形について分かったことを振り返って終わった。

(高島市立安曇小学校)

ことばの宝箱
北島 雅晴

「ことばの宝箱」というノートを作った。美しいことば、温かいことば等を私が選んで、毎日黒板の片隅に書き、そのことばを写すノートである。

○常に前進しなければ、後退が始まる(羽生善治)

○できなかつたこと、まちがったことから学ぼう(北島雅晴)

○あかねさす(万葉集)

「みなさん、羽生善治さんを知っていますか。将棋の棋士で、初めて七冠を達成した人です。現在五十歳を超えても、常に新しいことを取り入れようと努力をされています。……」

といったように、そのことばに関わる話をするようにしている。このノートには、好きなことばや心に残ることばを見つけた時は、書き留めておくように働きかけている。

ノートに自分の選んだことばがたまってきたので、日直が朝の会で紹介することにした。朝の会が始まるまでに、日直が黒板に書いておく。そのことばをみんながノートに写す。朝の会ではそのことばについて、日直が簡単に紹介するという活動を毎日続けている。

○美しいものは、人々にエネルギーを与える。
「このことばは、名言が紹介されている本の中から、一番心に残っ

たものを選びました。美しいものにふれたり見たりして、心のエネルギーを増やしていきたいです。」
○おそれるな、がんばるんだ。勇気の花がひらくとき、ぼくが空をとんでいくから。きつと君を助けるから。(やなせたかし)
「このことばは、今度学習する国語の教科書から選びました。やなせたかしさんは、震災の時に子どもたちをばげまそうとこのことばを伝えました。」

自分の読んだ本の中から、身近な人や好きな有名人のことばを聞いて等、子どもたちはいろいろなところからことばを見つけて紹介できている。

本校はどちらかといえば、言葉遣いに課題を抱えている。「うざい」「だるい」「むり」といったことばが、学習中においても出てくることがある。また、相手を傷つけることばを投げかけても、平気でいる姿も見かける。ことばが乱れてくると、人間関係が崩れる原因になるだけでなく、前向きに行動しようとする意欲も失われるのではないかと感じる毎日である。

「ことばの宝箱」をきっかけとして、美しいことば、温かいことば、自分の生き方を見つめることばに目を向けてほしい。そして、日々の生活での言葉遣いにも気を配ることが出来る人になってほしいと願っている。

(栗東市立葉山小学校)

気もちのよい〇〇  
弓削 裕之

二時間目に参観授業を控えた一年生。朝の会で、「今日はたくさんのお客様がいっぱいしゃいます。気もちのよいあいさつをしましょう。」と話をした。すると、一人の児童が、「他にもありますよ。」と手を挙げた。「どういいうことが教えてください。」と指名すると、「気もちのよい授業をしたらいいと思います。」と発表した。すると、「それを聞いた他の児童も、「まだあります。」と次々に手を挙げ始めた。これは、朝の会で終わらせるにはもったいないと思った。そこで、一時間目に予定していた内容を変更して「気もちのよい〇〇」という題名で授業をした。めあては、「気もちのよいものを見つけて。」だ。

- ① 気もちのよい あいさつ
- ② 気もちのよい じゆぎよう
- ③ 気もちのよい 学校
- ④ 気もちのよい 気もち
- ⑤ 気もちのよい ところ
- ⑥ 気もちのよい しせい
- ⑦ 気もちのよい ありがとう
- ⑧ 気もちのよい はっぴよう
- ⑨ 気もちのよい こえ
- ⑩ 気もちのよい しずけさ
- ⑪ 気もちのよい べんきよう
- ⑫ 気もちのよい 字
- ⑬ 気もちのよい 手のあげかた
- ⑭ 気もちのよい ノート
- ⑮ 気もちのよい きようかしよ
- ⑯ 気もちのよい すわりかた
- ⑰ 気もちのよい えんびつ
- ⑱ 気もちのよい えんびつのも
- ⑲ 気もちのよい ちかた

- ⑲ 気もちのよい みんな
- ⑳ 気もちのよい こくばん
- ㉑ 気もちのよい えがお
- ㉒ 気もちのよい きようしつ
- ㉓ 気もちのよい マナー
- ㉔ 気もちのよい いけん
- ㉕ 気もちのよい じかん
- ㉖ 気もちのよい まい日

番号は、子どもたちから出た順番。26個目で黒板がはしまで埋まった。黒板がみんなの言葉で埋まると、いつも拍手が起こる。「気もちのよい、はくしゆ。」と誰かがつぶやく。授業中は気がつかなかったが、「こうして並べてみると、言葉から子どもたちが見えてくる。」

「しせい」と発表した子は、参観授業でがんばるだろうな。「ありがとう」と発表した子は、誰かに言ってもらったのかな。「こえ」と発表した子は、音読を楽しみにしているかな。「しずけさ」と発表した子は、もっと静かに勉強したいかな。「みんな」と発表した子は、お友だちが好きなのかな。「マナー」と発表した子は、登下校のお勉強を覚えているのかな。「いけん」と発表した子は、聞き方上手さんだろうな。「まい日」と発表した子が、毎日楽しく学校に通っているといいな。こんな風に振り返ると、一つ一つの言葉がとても愛しくなってくる。子どもたちが選んだ言葉には、きつと意味があると思っている。そう考えると、全員の「気もちのよい〇〇」を聞きたかったなと思う。

(京都女子大学附属小学校)

人権作文への取り組み  
蜂屋 正雄

本校の四年生はやさしい子が多い。また、とても子どもらしく、素直で、元気である。しかし、その一方で、無自覚に相手を貶める言葉や小ばかにしたりする言葉を使ってしまふ場面がある。まだまだ、自己中心的な世界を持っている子が当然ながらいるためである。

本校の四年生は人権月間に人権作文をすることに、これまで取り組んできた、書く活動を通じて、自分の思いや願いを文章にし、学級の課題についてみんなで考えられないかと思ひ、取り組んだ。

- ① 人権作文を読む  
過去の人権作文で入賞している四年生の人権作文の中で、相手をきずつけてしまった経験を振り返っている作品を選び、「例文」として読んだ。
- ② テーマの話し合い  
「みんなが気持ちよく安心して過ごせるために」、どんなことができればいいのか、ということを学級で出し合った。
- ③ タイトルを決め、その理由を書く
- ④ 実際にあった出来事を書く
- ⑤ 出来事の中から、感じたこと・思ったこと書く
- ⑥ これからの生活でしていきたいことを書く

以上のことをプリントに書き溜めたうえで、人権作文に取り組んだ。文字数は原稿用紙三枚を目標に取り組んだ。その中で、「笑われるのがイヤだ」、「きつい言葉で注意されるのがいや」という意見が出てきた。それまで無自覚に人を傷つけてきた子にとっては、自分のそれまでの言動を振り返る大きなきっかけにでき、話し合いの様子を黙って聞いていた。

その後書き始めた作文のタイトルは「あんまりわらわれないようにするには」「ぼくのこと」「なかよくしたい」「わらわれない」「学校で楽しくすごす」などである。ふだん、もうちょっとこうしてほしい、もうちょっと気を付けたい、ということを書いた文章で書くことができた。ついつい笑ってしまったこと、自分がこれまで言われて実は傷ついていたこと、友だちから助けられたことやその言葉、学校で安心して過ごすためにしていきたいことなどを切々と自分の言葉で書き連ね形にしていた。

人権作文の取り組み以降「人の失敗や間違いを笑ってしまうのは、良くない。」「安心して失敗できる教室にしよう。」という共通認識ができ、つい、エラそうな物言いをしてしまふ子も気をつけるようになった。子どもたち自身の言葉の力を感じる学習にできた。

(野洲市立北野小学校)

さざなみ初提案

川部 長人

十一月のさざなみの例会で初めて提案を行った。今回の提案では「ICTを活用した国語科学習」について、『モチモチの木』と『話したいな、わたしのすきな時間』(東京書籍三年生)の二つの実践を行った。さざなみの先輩方から「さざなみでは、ほとんどほめられない。大変厳しいことも言われるかもしれない」と言われていたので、発表当日は朝からとても緊張していた。また「さざなみでは、子どもが変わったかということについて追究していく」ということも言われていたので、実践を行うときには子どもがどう変わったかを常に意識しながら行った。

さざなみの例会に参加する中で、国語科学習でのICT活用の有効性として、自分の考えを電子黒板にすぐに写すことができる「即時性」、カメラ機能などを使って音読練習など「消えていくものを残せる」、ICTを活用することで「子どもが授業に集中する」という三点を考え、実践を行った。『モチモチの木』の学習では「豆太は変わったか?」という考えを交流するときに、バイシンクというアプ

リを使って発表を行った。バイシンクを使うことで一人ひとりの考えを一覧でき、子どもたちは他の子の考えを聞きたくなる様子があった。また、全員の考えが電子黒板に表示されるので、普段あまり意欲的でない子ども自分できっかり考え提出していた。さらに、アンケート機能を活用することで、友だちの考えの変容についても交流することができた。『話したいな、わたしのすきな時間』の学習では発表練習を行うときに、カメラ機能を使い練習を行った。自分や友達の紹介の練習を撮影した動画を、聞き手の立場から視聴し合うことで、発表する側からだけでは気付くことの難しい、伝えたい大事などところは特に大きな声でゆっくり話すことなどに気付き、修正することができた。

授業検討会では大きく三点のことについて話が出た。一つ目に「豆太は変わったか?」について、〇か×だけでは考えられないのではないかとということである。〇か×で考えることは自分の立場を明確にし、授業に参加するという点ではメリットがある。しかし、人間として考えた時には〇か×の間にグレーゾーンがある。そのようなグレーゾーンを考えることが、物事をより多層的に考えるのではないかとということである。

二つ目に、カメラ機能で撮影したものを教師がどう評価するかである。カメラ機能で撮影したものを子どもたち同士で交流したが、評価の観点を子どもたちと十分に共有できていなかった。全体の前でどうよかったかを教師が示し、文字化して残しておくことが必要であった。また、音声言語は積み重ねが大切である。自分の学級ではどこを意識させるか優先順位を決めて、今後も学習を積み重ねていきたい。

三つ目に、ノート指導についてである。今までノート指導は板書をしつかり写すことしか指導していなかった。先生方にノートを見てもらったところ、子どもたちの考えが書かれている部分が少ないと言われ、今後は吹き出しなどを使って自分の考えを書けるようなノート指導を行っていきたい。自分の考えがたくさん書かれているノートは、世界でただ一つの自分の宝物なので、そういったノート指導を目指していきたい。

今回、さざなみで初めて提案させていただき、国語についてたくさん学びがあった。何より、子どもたちと国語の授業を早くやりたいという気持ちが高まった。学んだことを生かして、よりよい国語授業を目指していきたい。

(東近江市立能登川南小学校)

編集後記

▼十一月例会(四七六回)の提案は川部

さん(能登川南小) 研究主題「ICTを活用した国語学習の取り組み」研究教材「モチモチの木」(3年東書) 提案の要旨は次の通り▼  
まず、ICTを活用する有効性として「即時性」「消えていくものを残せる」「子どもが集中する」においた。電子黒板を活用した交流活動。音読における端末の活用により意欲を高める子どもの姿。さらに、カメラ機能を使い動画による自分や友達の紹介を行う「話す・聞く」学習等。ICTを有効に活用した実践であった。▼「モチモチの木」の構成と内容把握を目的に主人公の豆太とじさまとの関りを理解する。精査・解釈では、「豆太は変わったのか」を課題にバイシンク(アプリ)を活用して読む力を育てるという提案であった。▼教材「モチモチの木」の主な学習内容を教科書(東書)のリード文では、「想像したことをつたえ合おう」ということを目的にしている。人物を想像する時には、「地の文と会話文、それぞれから分かることをあわせて想像する」と示している。特に、「豆太は見た」の場面で、「医者様をよばなくっちゃ」と、ふもとの村までする豆太の様子を叙述を大事にするのが求められる。▼研究協議では、前半はICT活用の状況や効果・成果・課題を含めて意見や実践の交流。後半は、読みを深めることを目的にした授業で大事なことは何かについて話し合った。▼巻頭には、青木千波先生から玉稿を頂きました。深謝。  
(吉永幸司)